

「スケートはお金がかかるスポーツ。年間で最低120万円はかかるんです。トップクラスの選手になれば海外遠征にも行くので、さらにお

「6種目全てで優勝した完全優勝が1回、全員入賞という快挙が2回あります」と胸を張るのは、スケート部統括監督も務める鈴木恵一監督。現役時代に500mの世界記録を保持した時期があり、3度のオリンピック出場を誇る日本スケート界の重鎮だ。「選手の頃の私は、速く滑るためにいいと思ったことは、絶対に実行しました。そのため、それとは違うことを要求する先輩や監督に反発したものです。日本代表の監督にも逆らいましたね」

やがて3部門に分かれ、それぞれ指導者をいただき独自に練習をするようになった。3監督に、記念すべき本年度の抱負を聞いてみた。



スピード



千葉将志にはエースの滑りを期待したい



荻野達哉スピード部門主将
(政経4・白樺学園)



鈴木恵一スピード部門監督
(スケート部統括監督)



小野島真部長

金がかかります。正直いうと、今、インターハイで最上位の成績を残した選手は、奨学金が充実した他の大学に入ります。そのため明治の選手は入った段階で、優勝するという気持ちに欠けている部分がある。でもせっかくなってきた以上は、強くなって欲しい。私は、妥協は嫌いです。『楽しくやりたい』という時代のようにだけど、勝つことしか考えない。『なんで勝とうとしないんだっ！』『諦めるのかっ？』と、言うことも厳しくなっています」

熱血指導をするのも、真摯な態度で取り組む選手達に敬意を抱いているからだろう。

「スピードスケートは競技中、非常に不自然な体勢(腰を曲げ上半身を低くする)をずっと維持しないとイケないんです。最も辛いです。その辛さに耐え4年間頑張るんだ。卒業の時には『誇りを持って出て行け!』と言いたい」

長い歴史を誇る部だけに、時に長期低迷に陥ることもある。80年度から19年連続という長きにわたって優勝を逃した時期もあった。有力選手が専修大、日本大に集中したからだが、それでも明治は復活を遂げた。

エース千葉将志(政経3・白樺学園)に頼るシーズンが続いたが、今春、久保廉(政経1・帯広三条)、



2005年度のインカレ。通算3度目の完全優勝を果たし歓喜に沸く

紫紺の勇者たち *Heroes of the Meiji*

第42回 スケート部

文・撮影/菊地武頭
写真提供/明大スポーツ新聞、スケート部

—明大体育会の系譜—

インカレ総合優勝なんと54回 創部90周年の今年もV最有力

今年創部90周年にあたり、7月19日には品川プリンスホテルで祝賀会が華々しく催された。同会に橋本聖子日本スケート連盟会長も出席したことも分かるように、明治大学スケート部は日本スケート界を牽引する輝かしい歴史を誇っている。

「2005年度のインカレ決勝戦は、プレッシャーと責任感のようなものを感じました」

そう回想するのは、アイスホッケー部門の藤井匡智総監督。

2006年1月9日、帯広の森アイアリーナで行なわれた日本学生氷上競技選手権アイスホッケーの決勝戦。明治は、スピードスケート、フィギュアスケートで既に優勝を決めており、残るはアイスホッケーの決勝だけだった。

第1ピリオドを終えて法政大学に1対3とリードを許した明治だが、その後怒涛の攻めを見せ、ついに4対3と逆転してゲームセット。史上3度目の3部門完全優勝の偉業を達成した瞬間だ。

インカレでは、男子はスピード、

フィギュア、アイスホッケーの3部門が、女子はスピードとフィギュアの2部門が行なわれ、そのトータルで総合優勝が競われる。このような形で団体戦が実施されるのは、国内ではインカレのみである。

総合優勝を争うシステムは、男子は1928年度から、女子は81年度から行なわれている。明治は、男子が54回も総合優勝を果たしてきた。しかも3部門全てで優勝をする完全優勝を経験している大学は、明治だけ。女子も5回総合優勝をしている。まさに名門中の名門大学だ。本学の数ある体育会所属部でも、その戦績は群を抜いている。

スケート部の創部は1925年(大正14年)。もともとは山岳部員が集まって作られたという。というのも、冬山に登った部員が凍結した湖で滑ったことがきっかけだったからだ。発足当初は部員不足から、一人で3部門をこなす選手も多く、大会ともなると午前はスピードスケート、午後はアイスホッケー、翌日にフィギュアに出場することもあったという。

「リーグ戦は2カ月半にわたって行なわれるので、その間のコンディション作りが難しいんです。できれば期間中は毎日、全員が揃った状態でチーム練習をしたいんですが……」
他の大学にも共通していることだが、練習場の確保が難しいのだ。

「その前の年は近年最強と言われながら、無冠に終わったんです。その悔しさから去年は、力以上のものを出せたいと思います。とても勝負強いチームで、ほとんどの試合が接戦でしたが、それらをきちんとものにしました」
と、藤井総監督も満足そう。

アイスホッケーには、春の関東選手権、秋の関東リーグ、そしてインカレと3つの大きな大会がある。開催時期や方法の違いにより、3大会を全て制するのは滅多にないが、明治は昨年度、この3大会にサマーカップを加えた全4大会で優勝を果たす快挙を成し遂げた。

が、絶対的な安定感を誇っている。「今年は男女共に優勝を狙えるところにあります」

アイスホッケー



期待の新人・鎌田英嗣。トリプルアクセルを武器に



藤井匡智アイスホッケー部門総監督



大津晃介アイスホッケー部門主将(法4・日光明峰)



FW大塚舞人(法4・白樺学園)がどれだけ点を取るかのだ。



野添紘介フィギュア部門主将



伊東秀仁フィギュア部門監督

フィギュア

小林耕大(政経1・佐久長聖)という逸材が入学。「楽しみな1年生が2人も入ってきた。浮上のきっかけにしたいですね」

男子は38回、女子は7回の優勝を誇るフィギュア部門。しかし近年は、中京大学と関西大学の後塵を拝することが多くなってきた。

伊東秀仁監督が説明する。

「中京大も関大も、独自のリンクを持っているんです。そのため、そちらの大学を目指す有力選手が多いのはたしかです。そんな中、明治は常に2位、3位に入っていますし、リンクのある学校に勝ちたいというのを合言葉に練習しています」

大学スポーツ界において、フィギュアスケートは特殊な競技ということが出来る。

そもそも個人競技なうえ、選手のほとんどが幼少期からコーチについて練習してきた。そのため大学入学後も、選手はそれぞれ専属のコーチがいるリンクで練習する。

明治大学の選手だからといって、部員全員が同じ場所と同じ時間に一緒に練習をするというわけではないのだ。

ただ、同じリンクで練習をする先

輩後輩もいますし、大会や合宿を通じてミーティングをするなどして、かなりまとまりがあります。他校と違って、明治の部員は学校に対する想いが強い。これまでの歴史が育んできた「明治魂」を、おのずと皆持つようになるんですね。スピードやアイスホッケーの選手との横つながりも大事にしています。フィギュアの女子選手がアイスホッケーの試合を応援に行ったりね。3部門一緒になってインカレで戦うという姿勢ができています。他の部門の選手のためにも、フィギュアが足を引っ張るわけにはいきません」

明治を愛する気持ちは、卒業してからも強く持ち続けるそうだ。

「夏の合宿には、2〜3代前の先輩が練習の手伝いに来てくれます。これは、他校ではないことですね。臨時コーチとして、最新の技を自ら滑り手本を見せながら教えてくれるので、私も助かっています(笑)」

さて今年度だが、男子ではトリプルアクセルを得意とする野添紘介(商4・東福岡)に加え、昨年インターハイ準優勝を遂げた鎌田英嗣(営1・獨協)、ら有力3選手が入学。一気に層が厚くなり、出場枠(3人)を巡る部内競争が激化した。

女子では前人未踏の個人4連覇を目指す西野友穂(政経4・武蔵野)が……。明治は文武両道を目指し、授業優先です。ですから1限の授業のある選手は、練習ができません。夏合宿で全員揃った状態で練習しても、秋になったら、それができなくなってしまうんです」

近年、大学アイスホッケー界の勢力図が変わり、戦国時代の様相を呈しているという。

「昔は2強というシーズンが多かったんです。明治と法政、あるいは明治と東洋というようにね。でも最近は各校戦力が拮抗して、5校くらいが僅差で争うシーズンが増えました。どこにでも優勝の可能性があるし、ベスト4に残れないことさえあるんです。選手達には、『僅差が大差』と伝えています。優勝とそれ以外では、大きな差なんですから」

今年度は、4冠を果たした主力がほとんど残っている。ところが、春の大会では中央大学に敗れて準優勝に終わった。僅差が大差であることと身ををもって知った選手達の逆襲に期待したい。今年度インカレを制したなら、30回目の優勝となる。